

「力能扛鼎、才氣過人」

杉山寛行

史記「項羽本紀」の歴史的時間は、「秦二世元年」の紀年のもとに動き始める。しかし項羽本紀の本文には「項籍者、下相人也。字羽」という人定記述のもとに、形式的には独立しながら、意味的には自立していない八つの断片がその前に置かれている。

形式的に独立しているというのは、断片相互の間に時間的な間隙があり、また一部には時間の遡行もみられて、断片間相互には直接的な関係がないこと。このことは、歴史的時間が流れ始めた後の記述が、概ね時間の流れに沿って記述が進行し、因果の関係が明示されているのとは対照的である。また断片内部では「於是」「以故」「以是」「以此」などを用いて、それぞれの完結性を高めていること、更には項羽が文字を習い、剣を学び、また兵法を学んだけれど、いずれも最後まで学びおえることがなかった、というエピソードに見られるように、三度の繰り返しを用いて説話としての纏まりを示しているものがある、などによって支えられている。

意味的には自立していないというのは、その断片だけでは内包された意味を充分には推し量ることが困難であり、読む者には宙吊りの感じがするという点に現れている。別の記述を俟って初めてその意味は明かにされるのである。

項梁が呉中に仇を避けていた時、大規模な土木工事や葬儀があるたびごとに秘かに兵法を用いて人々の能力を知っておいたという断片は、叛乱を起こした後、軍における任務の配置を編成する際、新しいエピソードが語られることによって、伏線として遡及的にその全体の意味を初めて明らかにする。これはきわめて単純な例ではあるが、他の断片も同様な機能を有している。

「項氏は世世楚の將爲り」と、やや唐突に項氏の家柄を語る断片も徐々にその意味を明らかにしていく。

東陽で叛乱が起こった時、王にまつりあげられそうになった陳嬰は、軍吏に次のように言って辞退する。

「項氏は世世將の家にして、楚に名有り。今大事を擧げんと欲するに、將、其の人に非ずんば、不可なり。我、名族に倚らば、秦を

亡ぼさんこと必せり」。

かくして陳嬰は項梁の軍に帰属するのであるが、こうして項梁もしくは項羽が大事をなし秦を滅亡させるための統率者として適任である理由が明らかにされている。范増はこの間の消息を一層具体的に述べている。項梁が江東で叛乱を起こし、それに呼応して蜂起した武將たちがみな争って項梁に帰属した理由を、彼は次のように言う。

「君世楚の將たりて、能く復た楚の後を立つと爲すを以てなり」。

叛乱を起こしている人々が望むことは、秦によって亡ぼされた戦国の六国、そこには当然楚も含まれるのであるが、その再興にあるのであって、そのためには統率者としての項氏が代々將軍の家柄であったことが、彼らの希望の実現を可能にするものとして映っている、と言うのである。

それに対して、陳勝は最もはやく叛乱を起こしたにもかかわらず、楚の後裔を楚王に立てず自らが勝手に即位してしまった。これではその勢力が長続きするはずはない、と言うのは、この事情を反対の側から指摘し強調しようとするものである。

この范増の言をもっともなものとして、項梁は民間で人のために牛飼いをしていた楚の懷王の心を探しだし、彼を楚の懷王として即位させる。これは「民の望む所に従へるなり」とされる。

「精兵八千人」から興った項梁、項羽の軍は、陳嬰のエピソードを経て「凡六七萬人」に増大する。また秦軍に破れ危機に陥ってい

た楚軍は、范増の進言を受け入れた後、項梁自らが武信君となって楚軍の態勢の建て直しに成功する、という記述が導かれる。

こうして「項氏は世世楚の將爲り」という断片が、戦国時代の旧六国体制の再建者としての項梁、項羽の性格を物語り、それ故に叛旗をひるがえした当初には叛乱軍の力を結集できた理由をも示すための伏線であったことが理解されるであろう。

しかしこのことは項羽が実際上の権力を掌握するに到ると微妙な問題を孕むことになる。

すでにそれは項羽が上將軍宋義を殺戮した際にさざしているかもしれない。

「首に楚を立てし者は、將軍の家なり。今、將軍、亂を誅せり」というのが、諸將の言葉である。

次將である項羽が上將軍である宋義を殺戮し、彼が率いる卿子冠軍を壊滅させた際、恐怖におののく諸將がいち早く楚を再興したのは將軍の家だとし、項羽の謀反を肯定していく時、彼らが希望を託して項羽の家柄に言及した場合は意識のありかたがおおよそ異なったものとなっていよう。

項羽自身の発言の中にも、同じように意識する部分が増大していったように記録されている。

項羽が秦の都咸陽を殲滅し、秦王子嬰を殺して、そのことを楚の懷王に復命した時のことである。懷王は項羽の期待に違い、關中に一番乗りした者に秦の地を与えるという約束を実行させようとする。

これに対する項羽の態度は次のように記述されている。

「項王、自ら王たらんと欲し、先づ諸將相を王たらしめ、謂ひて曰く、「天下、初め難を發せし時、假りに諸侯の後を立てて、以て秦を伐てり。然れども身、堅を被り鋭を執りて事を首め、野に暴露すること三年、秦を滅ぼして天下を定めしは、皆將相諸君と籍の力となり。義帝は功無しと雖も、故より當に其の地を分かちて之れに王たらしむべし」。

秦を討伐し天下を平定したのは紛れもなく自分であると意識し、自身王になろうとした時、それに比例するように、懷王には何の功績もなく、懷王を義帝としたのも、また何よりも最初に叛旗をひるがえした時懷王をいただいたのも「假りに」であつたという、項羽の意識が増大していったことがみてとれる。

このことは、後に義帝を江中で暗殺する事件に結びついていくであろうし、論功行賞の不公平にも大きく係わってくる。少なくとも不満分子にはそのように意識されたとされている。

陳餘は同じく項羽に対する不満分子であつた田榮を説得して、次のように言う。

「項羽、天下の宰と爲りて平ならず。今、盡く故王を醜地に王たらしめ、而も其の群臣・諸將を善地に王たらしめて、其の故主を逐ふ」。

そしてこの事態が項羽の滅亡に直接結びついていくのである。

項羽本紀の前半部分では、「江西、皆反けり。此れ亦た天の秦を

「力能扛鼎、才氣過人」(杉山)

亡ぼすの時なり」と言い、「且つ天の秦を亡ぼさんとすること、愚智となく皆な之れを知れり」と言つて、「楚は三戸と雖も、秦を亡ぼすものは、必ず楚なり」としている。しかし後半部分になると一転して「楚、兵罷れ食盡く。此れ天が楚を亡ぼすの時なり」と言い、後述するように、項羽自らが三度にわたつて「此れ天の我を亡ぼす」と言うのである。しかも既に鴻門の會において「此れ亡秦の續のみ」と指摘されてもいるのである。

こうした分節化と伏線とによって導かれ明らかにされる含意は、「項氏は世世楚の將爲り」の記述によって導かれる展開と、平行的な関係にあることが明瞭である。

項羽本紀は項羽の勃興と滅亡とをその中心主題として進行するが、であれば「項氏世世楚の將爲り」とやや唐突に冒頭に置かれた一句は、その勃興と滅亡の理由の一つを語るための重要な伏線として機能しているといつてよいであろう。

二

項梁はあるとき櫟陽で逮捕されたことがあつた。この時獄掾曹咎、司馬欣の両者の周旋によつて事件を沙汰止みにすることができた。冒頭の断片は以上のことのみを記す。

当然この記述も伏線としての機能を果たすのであるが、対応する最初の記述はきわめてさりげなく示される。棘原に軍を構え項羽の軍と対峙した秦の將軍章邯は、都からの二世皇帝の度重なる叱責に

怯え、長史欣を派遣して諒解を求めようとした。司馬門に三日のあいだ留め置かれた長史欣は、宰相趙高の章邯への不信の心を読み取り、逃げ走って章邯に項羽への降伏を勧める。この功績が認められ上將軍となり、新安での二十余万人の坑埋めからも免れた「長史欣」と記されたこの人物が「司馬欣」であることは、この段階では明確にされてはいない。明かされるのは、侯王の分封のリストを示す段に至ってである。

「長史欣なる者は、故と櫟陽の獄掾爲りて、嘗て項梁に徳有り。・・・故に司馬欣を立てて塞王と爲し、咸陽以東、河に至るまでに王たらしめ、櫟陽に都せしむ」。

ここで再度「長史欣者」と始めて、次に冒頭の断片に対応する「司馬欣」という呼称を用いているのは、伏線の機能を意識的に働かせていることの証左となろう。最初に明示されていなかったことで、ここに至って読む者には発見と驚きとをもたらず。単に歴史事実をのみ記すというのであれば、言うまでもなく最初に明示しておけば事足りるのであって、ここでは文学的技巧の積極的な応用とみるべきであろう。

更にこの断片は記述を重ねて、含意された意味を露呈させていく。項羽の敗北の決定的な原因をなすのは、梁の地での彭越の叛乱とその結果起こった食糧輸送の途絶。更に項羽自らの梁の地平定とその留守の間の汜水で蒙った壊滅的打撃である。「項王乃ち海春侯大司馬曹咎等に謂ひて曰く「謹んで成皋を守れ。則へ漢が戦いを挑ま

んと欲するも、慎みて與に戦ふことなかれ。東するを得しむるなきのみ。我、十五日にして必ず彭越を誅し、梁の地を定めて、復た將軍に従はん」。

項羽の命令は漢の挑戦にのるな、ということであるが、皮肉なことにはこれ以前しばしば漢に戦いを挑んだのは項羽なのであり、「漢王笑ひて謝して曰く「吾は寧ろ智を鬪はすとも、力を鬪はす能はず」といなされてさえているのである。また「目を瞞らせて之れを叱す」と突きかかるように戦いを挑んでいったのも、他でもなく項羽なのである。

項羽が「漢が戦いを挑まんと欲するも、慎みて與に戦ふことなかれ」というのに対応して、「漢、果たして數しば楚の軍に戦いを挑む」。最初は挑戦にのらなかつた楚も、五六日と続く侮辱に抗しきれず、「大司馬、怒りて兵を汜水に渡す」。

物語の行く末は、ここにおいてすでに明らかである。予め述べられる禁忌は破られるためにこそ記述されるのであり、「十五日」と殊更に強調される予告は実現されぬが故に予め語られるのである。

「大司馬曹咎、長史翳、塞王欣、皆汜水の上に自刳す」。その上で「大司馬曹咎なる者は、・・・長史欣も亦た・・・」と冒頭の断片が再度想起されて、「兩人は嘗て項梁に徳有り。是を以て項王之れを信任す」と記される。

この事件が楚軍にとって決定的な打撃となったことは、この後、項羽本紀が楚漢両軍の状況を「是の時、漢、兵盛んに食多く、項王、

兵罷れ食絶つ」と記し、楚軍が食糧輸送の途絶に続いて兵力の疲弊と食糧の蕩尽とに陥ったことを示すことに表れている（項羽本紀が、この間の楚漢の戦況の進展を兵と食との状況を繰り返して指摘することとで表現することについては後述する）。この記述を受けて、張良、陳平が漢王に「楚、兵罷れ食盡く。此れ天が楚を亡ぼすの時なり。其の機に因りて遂に之れを取るに如かず」と進言することからもそれは窺われる。

またこの進言は、鴻門の會における范増の勧告やとりわけ「漢之三年」の条の進言とはきわめて対照的である。そこで范増は「今、釋てて取らずんば、後に之れを悔いん」と述べたと記す。その記述上の類似も見逃されてはならない。しかし項羽は范増の勧告を受け入れず好機を逸するのに対し、「漢王は之れを聴く」のである。次に続く記述は既に項羽の最期を描く「漢の五年」の条であって、事態はここに決してしまったと言える。

ところで、前述したように「謹んで成皋を守れ。則へ漢が戦いを挑まんと欲するも、慎みて與に戦ふことなかれ」と言う項羽の言葉が皮肉なニュアンスを醸し出すのは、その前に巧みに布置されたエピソードに拠る。第一に、項羽は高祖の父太公を組に載せ、高祖に強引に降伏を迫るが失敗する。第二に、項羽は「天下匈匈たること數歳なるは、徒らに吾ら兩人を以てのみ。願はくは漢王と戦いを挑み、雌雄を決せん。徒らに天下の民の父子を苦しむるを爲すなかれ」と、今度は一転して天下の民の大義から高祖に戦いを挑む。それは

「力能扛鼎、才氣過人」（杉山）

「漢楚久しく相持して、未だ決せず。丁壯は軍旅に苦しみ、老弱は輻漕に罷る」という現実的な要請を承けてのことであり、項羽の言は「大義」としてそのまま受け取ることとはできないものとしてある。それに対し、高祖は「笑ひて謝し」、項羽をいなすのである。二人の心理の複雑な陰翳が、巧みに読む者に伝達される。第三には「項王、壯士をして出で戦いを挑ましむ」。しかし漢軍のがわには樓煩がおり、「戦いを挑むこと三合」、その都度射殺されてしまう。そこで「項王、大いに怒り、乃ち自ら甲を被り、戟を持ちて、戦いを挑む」。「樓煩之れを射んと欲す。項王、目を瞋らせて之れを叱す」。項王の怒りと焦燥とは加速度的に増大する。第四は、廣武での項羽高祖両者の会見となる。ここでも高祖は項羽の罪十か条を列挙して責めたてる（ただし項羽本紀では十か条の内容は省略されている）。そこで「項羽怒り、一戦せんことを欲す」るが、「漢王、聴かず」。項羽の側からする幾たびかの挑戦、その度ごとにだんだんと前面に出てくるようになる項羽の態度、加速度的に増大する項羽の怒りと焦燥。以上のような布置の上で、「漢が戦いを挑まんと欲するも、慎みて與に戦ふことなかれ」というエピソードが語られるのである。漢書陳勝項籍別傳卷三十一は、ところがこの記述の順序を異にしている。

漢書では、大司馬曹咎、長史欣の汜水での自刎をその最初に述べ、その後で四つのエピソードを記述する。そこでは、項羽の焦燥は依然描かれることにはなるが、この間に含まれる皮肉な味わいはすっ

かり影を潜めることとなる。そして更に、大司馬曹咎、長史欣の汜水での自刳が、項羽にとって壊滅的打撃をもたらす、という行文中での意味は失われてしまうことになるであろう。

ただ急いでつけ加えるなら、項羽本紀のこの間の記述は高祖本紀とも記述の順序が異なっており(エピソードの省略と附加とはある)、歴史的記述としてみるなら、漢書の方が正確であるであろう。この点については、清の梁玉繩「史記志疑」巻六に論考がある。そしてその事実も、ここでの技巧を強く感じさせる。

「兩人は嘗て項梁に徳有り。是を以て項王之れを信任す」という記述の意味するところは、項羽の分封が「項羽、天下の宰と爲りて平ならず。今、盡く故王を醜地に王たらしめ、而も其の群臣・諸將を善地に王たらしめて、其の故主を逐ふ」というものであり、この兩人の場合ひとりわけ項梁に対する個人的な恩義を施したという因縁によるものであったこと。更にこの両者に対する信任が結果的には項羽の敗北を決定的にしたこと、を含む。分封のリストにおいては「長史欣なる者は、故と櫟陽の獄掾爲りて、嘗て項梁に徳有り」と記し、その最後では「兩人は嘗て項梁に徳有り。是を以て項王之れを信任す」と記して、「兩者を対応させつつ」「是を以て項王之れを信任す」とつけ加えるのは、意識的な技巧が感じられる。なおこれも梁玉繩「史記志疑」巻六には、最後の記述は本来「大司馬咎、長史欣皆自刳汜水上」とあるべきであり「翳、塞王」は行文文であるとす。漢書項籍傳も同じ。であれば冒頭の断片との対応は一層緊密

なものとなる。

いずれにせよ、冒頭やや唐突に紹介されるこのエピソードの射程は、このように思いのほか長いものであることが確認できよう。

「初め起ちし時、年二十四」という断片も、叛乱を起こした記述とはかけ離れて置かれているという記述の唐突さと同時に、凡そ史記全体を通じても事件当時の人物の年齢を殊更に記述する例が稀であることを勘案してみるなら、その表現には思わせ振りのものがあると言える。

ここで強調されていることの第一は、項羽の「若さ」であろう。「若さ」の意味する第一は、常に対比される高祖との比較において発生する。「史記集解」が引く徐高の注に拠れば、「高祖時年四十八」。項羽と高祖との若さと老練との対比は、ここでも強調されているとみるべきであろう。その第二は、論贊に「勢ひに乗じて隴畝の中より起り、三年にして遂に五諸侯を將いて秦を滅ぼす……五年にして卒に其の國を亡ぼし、身は東城に死す」と言う項羽の「勢ひ」の速やかさ、「三年」にして秦を亡ぼし、「五年」にして自らの國を亡ぼす速やかさと「若さ」との関係であろう。痛惜と批判とはともにこの「若さ」に向けられている、といつてよい。

更に第二には、物語内部で照応されるべき人物の強調であろう。項羽本紀には年齢の記載される人物が二人存在する。

その一人は、「年七十」と記される亞父范増である。ここでの対

比はまた若さと老獪さである。既に述べたように、項羽は范増の勸告を二度にわたって受け入れない。どちらの場合もし受け入れておれば、天下の帰趨を決するものであったにもかかわらず。そもそも亞父范増と呼称され「奇計を好む」と記述されながら、范増は項羽本紀のなかでは項羽には一度として意見を聞き入れられることがない、かの印象を与えている。ただ聞き入れられるのは、陳平の謀略（記述の上からはまったく子供じみた反間の計としか思われな）によって漢との内通を疑われたあげく権力を剝奪され、怒って引退を申し出た時のみである。皮肉にも、その時だけは「項王之れを許す」のである。范増はその結果怒りのうちに背中に疽を發して死んでしまう。

漢の三年、自軍の食糧の窮乏に恐れれた高祖の提案を、「項羽、之れを聽かんと欲す」るが、この時范増は「漢は與し易きのみ。今、釋てて取らずんば、後に必ず悔いん」と進言する。そこで項羽は軍を進めて漢を包囲するのであるが、漢の提案に対して「聽く」と記しながら、范増の進言に対しては結果としての行動を示すのみである。またすぐ引き続いて、陳平の策略と范増への疑念とが記されるため、范増の進言が項羽によって聞き届けられたという印象を薄いものにしていく。范増のいま一つの進言は、鴻門にあつて覇上にある漢軍に急襲をかけること、であったが、これも項羽によって斥けられた訳ではないのに、記述の上では、范増の言葉の後、直接に項伯のエピソードが挿入されることによって、進言への項羽の態度が

「力能扛鼎、才氣過人」（杉山）

曖昧なものとしてしまっている。

武田泰淳は、「項羽本紀」には「怒る」と云う文字がよく出てくる。何かあると項羽は怒る」と指摘している（「司馬遷—史記の世界—」今 講談社学術文庫所収）。そしてそこに「司馬遷が彩る歴史画の色彩の不思議な魅力」を生み出す、「小説家らしい構成上の装置、つまり仕掛け」を見出し出している。しかし丁寧な言なら項羽が「怒る」のは物語の冒頭からではなく、高祖の軍に函谷關を閉ざされた以降に類出するのであり、と同時にこのあたりから「許諾す」「許す」「聽く」といった表現に類似する言い回しが頻りに現れるようになる。死を覚悟しながら逃げる項羽が陰陵で道に迷い、「一田父に問ふ。田父給きて曰く、左せよ。左す」。そして一気に漢軍に追いつかれるのがその典型である。怒りに駆られて起こす項羽の行動と時に優柔不断であったり時には奇妙に映る許諾とによって、項羽はその最期へと駆け走っていくのである。そこに老獪な范増の進言を受け入れない、または曖昧にする記述が差し込まれているのである。

このようにして見るなら、鴻門の會において高祖を取り逃がした後、范増の口にする言葉、「ああ、豎子、與に謀るに足らず」「豎子」（小僧っこ）とは、直接には高祖擊殺に失敗した項莊を指すであろうが、その向こうに強く「若き」項羽が意識されないではおられない。

いま一人は、「年十三」であり且つ項羽に勸告をすんなりと受け

入れられるという、范増とは対照的な人物として登場させられている。梁の地での彭越の叛乱平定のため、十五日の期限を設けて出陣した項羽であったが、最初の地外黄で思わぬ日数を費やすこととなる。そのため外黄が下ると、「項羽怒りて、悉く男子十五已上なるものをして」つまり兵役年齢以上の者を既埋めにせんとする。そこに登場するのが、名も明らかにされることのない「外黄の令の舎人の兒、年十三なるもの」であり、項羽は奇妙なことにその年端もゆかぬ子供の勧告をすんなり容れて、阬殺を中止しすべてを赦免してしまう。「年七十」の范増と「年十三」の外黄の令の舎人の兒。その皮肉な対比は、殊更に記された年齢によって特殊化され、そのことによって読む者をその対比の確認へと導いていると言えよう。

三

英雄始皇帝に対してもらす項羽の言葉、これも高祖本紀の高祖の言葉と対照して理解されるべきこと、言うまでもない。ただ注意を促しておけば、史記の各篇章はそれ自体で独立していると同時に、このように他の篇章の記述を俟って新たな意味を派生することが期待されてもいるのである（朱自清は「史記菁華録指導大概」で「互見法」と名付けて説明する。今「史記菁華録」所収）。項羽と高祖とについては、田中謙二「項羽と劉邦」（今、朝日文庫「史記三」所収）に詳しい。

「項羽のことばが露骨で性急なのに対して、高祖のそれがつま

しく熟慮的であることが、ふたりの性格を端的にしめすものとして、つねに比較対照される」（田中謙二・一海知義前掲書）。

ここにつけ加えるとすれば、項羽についての記述は「梁輿籍俱觀」とあり、その上で項羽は「露骨で無思慮な」（田中謙二・一海知義前掲書「史記二」言葉、「彼、取りて代はるべきなり」を吐くのであり、一方の高祖も「縦觀、觀秦皇帝」と記した上で、「嗟乎、大丈夫當に此くの如くなるべし」と発言するのである。「觀を縦にす」とは、拝觀が禁止されているのに、禁を犯してぬすみ見た」（同右「史記三二」）であって、始皇帝をじっくり眺め觀察する態度自体には、両者の共通性を見いだすことも同時になされなければならない。

更に項羽本紀と高祖本紀の記述は、その歴史的時間の起点を「秦二世元年七月（秋）」陳勝の叛乱においている。換言するなら、史記の記述上では、陳勝の存在なくしては項羽も高祖も歴史的人物たりえなかつた、と言えるのである。世家としては異例にみえる「陳涉世家」の存在の意味もそのことに関係するであろう。であれば陳勝は常に項羽と高祖とに比較対照されるべき存在であり、その陳勝が、「王侯將相、寧ぞ種有らんや」と発言していることは見落とされるべきではない。始皇帝に対して天下を窺う三種の、同一性を根底に持ちながらも、相異なつた性格がここでは対比されている、と見るべきなのである。

冒頭の断片には、項羽の叔父項梁の父は楚の名将項燕であり、項燕は秦の將軍王翦によって殺されたという記事が、これもやや唐突に挟み込まれている。陳勝は秦への叛旗を翻した時、呉廣とともに公子扶蘇、項燕を許称したという陳涉世家の記述と重ね合わせるなら、「項氏は世世楚の將爲り」の句について述べたことと同様な含意がここでも読みとりうるであろう。また項羽本紀内部での照応を考えるなら、項羽の軍は鉅鹿の戦いにおいて「王離を囲み」「王離を虜にす」るが、この王離こそ王翦の子王賁の子であり、王翦からすれば孫にあたる。

秦がこの王翦の孫王離に趙を攻撃させようとした折の記述が、白起王翦列傳にみえる。

「或ひと曰く、「王離は秦の名將なり。今、彊秦の兵を將いて新造の趙を攻めなば、之れを擧ぐるに必ずなり」と。客曰く、「然らず。夫れ將爲ること三世なりし者は必ず敗る。必ず敗れしは何ぞや。必ず其の殺伐する所多し。其の後其の不祥を受ければなり。今、王離は已に三世の將たり」と。」

この記事をこの断片に照応させ重ね合わせるならば、項燕、項梁、項羽と王翦、王賁、王離との三世に互る復讐譚が、ここからはたちあらわれることとなる。

四

「籍、長け八尺餘、力能く鼎を扛げ、才氣、人に過ぐ。呉中の子

「力能扛鼎、才氣過人」(杉山)

弟と雖も、皆已に籍を憚る」。

項羽本紀については、吉川幸次郎「項羽の垓下歌について」(『中国文学報』第一冊 1954)が優れた分析をおこなっている。本稿はその前半部分と重なりあう部分があるが、それにもかかわらずあえて以下の試みをするのは、吉川論文に対していささか補足する部分があるであろうし、何よりも、この断片を含む八つの断片全体にわたって、その機能を作品のかたちから考えるための前提として位置づけるからである。

項羽の身長が並外れて高いものであった、という記述は、論贊の中で記している、項羽が舜と同じく「重瞳子」つまり瞳が二つずつあったことを記すのと同様な英雄伝説とみなすことができよう。常人と異なる優れた能力を有する英雄は、外見的にも常人とは異なった特徴を持つとされるのである。こうした常人とは異なった能力は、次の句に具体的に示される。「力は能く鼎を扛ぐ」。その力は鼎をさしあげることのできるほどであったし、その結果人をはるかに凌駕する才気を持ち主であった、というのである。

高祖についてみるなら、「高祖の人と爲り、隆準にして龍顔、須髯を美しうし、左股に七十二の黒子有り」と外見的特徴を述べ、更にいくつかの神秘主義的な逸話を載せている。

ところでこの断片は、既に多くの指摘があるように、項羽最期の「垓下歌」に直接連なる伏線となっている。

漢五年、垓下で敵漢軍に幾重にも包囲された時、本来味方であるべき楚人のうたう楚歌が四方からきこえてくるのを耳にして、孤立無援の想いのうちに死を覚悟する項羽は、次のように歌う。

「力、山を抜き(兮)氣、世を蓋ふ

時利あらず(兮) 驪逝かず

驪逝かざれば(兮) 奈何すべき

虞や(兮) 虞や(兮) 若を奈何せん」

動くはずのない山、わが力はその山をさえつらぬき、広大無辺な世界、わが氣力はこの世界でさえも蓋いつくす。天下を我がものとせんとする、人間としての実力。自分がそうした実力を十分に備えていることを高らかにうたう第一句が、冒頭の断片と呼応しあっていることは、簡単にみてとれるであろう。

しかし天、人間を超えた力は自分に与してはくれない。この「時」を「天」に置き換えてみるなら、第一句と第二句との対立はそのまま「此れ天の我を亡ぼすにして、戦ひの罪に非ざるなり」という項羽の確信に重なり合うことになる。二度にわたって繰り返されるこの確信の証明のために、項羽はまだ死ぬことはできず、物語は更に新たに展開する。

ところで、このあたりには、いくつもの周到に張り巡らされた伏線が存在する。

「項王、乃ち大いに驚きて曰く、「漢、皆な己に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや」と。項王、則ち夜起きて、帳中に飲む」。

ストーリーを語った後、次のような対になった句が突然挿入される。「美人有り、名は虞、常に幸せられて従ふ。駿馬、名は驪、常に之れに騎す」。

ちなみにこれに続く部分は、「是こに於いて項王、乃ち悲歌忼慨す」と再びストーリーに戻っている。ここでの虞及び驪の第一の機能は明らかであって、項羽の歌の第二句以降を導くものとしてある。人間を超えたもの、天命に人間より鋭く感応するものとしての驪、その驪が一步も足を進めないのであれば、自らの天命の尽きたことを自覚せねばならない、そうした存在としての驪。また「常幸従」「常騎之」とあるのであれば、歌は、自身の最も華やかな時期を共に過ぎ、自らの覚悟と悲しみを理解してくれる存在としての虞と驪とに向けて、発せられる。またそうした存在であるからこそ、天命に対する覚悟にもかかわらず、未練をも寄せることとなるのである。第三句及び第四句は、ひとまずそのように読むことができる。であるとすれば、物語の構造の上からは、項羽は命運尽きたにもかかわらず、死ぬことはできない。二つの軸、項羽の確信、「此れ天の我を亡ぼすにして、戦ひの罪に非ざるなり」の証明と、虞及び驪への未練の解消、この二軸が物語を展開させ、「今日、固より死を決す」と死を覚悟した項羽をも死へ赴かせることをしばしとどめるのである。

前者については、「諸君をして、天の我を亡ぼすにして、戦ひの罪に非ざるを知らしめん」と宣言し三たびの勝利をおさめることで、

項羽自身の主観的な想いにも物語の要請にも答えて、収束する。

後者については、虞は、項羽が何度も繰り返して歌った後、「美人、之れに和す」。唐の張守節「史記正義」は、「楚漢春秋」を引いて、虞の唱和した歌を載せる。その第三、四句は、「大王、意気盡きたるに 賤妾 何ぞ生を聊（ねが）はん」とあり、これは項羽とともに死を覚悟するものと読める。またその後ここから派生していくつかの説話もその方向に敷衍する。であれば、項羽本紀の次に続く「項王、泣だ數行下る。左右、皆な泣き、能く仰視する莫し」の記述も、こうした内容を承けたものとしても読みうる。またたとえ虞の死を前提にしないとしても、項羽の未練が虞に受けとめられ唱和されることによって、物語の構造の上からは充分収束するであろう。一方騷は、物語の最終盤、烏江において現れる。

「項羽、乃ち東のかた烏江を渡らんとす」。にもかかわらず、烏江の亭長が「今、獨り臣のみ船有り。漢軍至るも、以て渡る無し」と渡江を勧めると、とたんに「項王、笑ひて曰く、「天の我を亡ぼすに、我、何ぞ渡るを爲さん」と拒絶するのである。既に述べたように、天命と人間としての能力とのせめぎあいという物語の枠組みは、この時点では収束している。ここではその再度の確認と言ってよい。「且つ籍、江東の子弟八千人と江を渡りて西せしに、今、一人の還へるもの無し。縦へ江東の父兄、憐れみて我を王たらしむとも、我、何の面目ありてか之れに見えん。縦へ彼れ言はずとも、籍、獨り心に愧ぢざらんや」。ここでは「江東子弟八千人」が、項羽本

「力能扛鼎、才氣過人」（杉山）

紀全体を枠取りする重要な鍵であること、既に拙稿で説いたことがある（「項羽本紀を読む」）。つまり射程の比較的短い枠組みも全体にわたる枠組みもここで収束させられているのである。渡江する必然のない項羽が一旦は「東のかた烏江を渡らんとす」るのは、江を渡って始まった物語を、江を渡って戻ることのない物語へと収束させんとするための、物語の構造上の要請にすぎない。ここにおいて物語はほぼ全体として収束するのであって、項羽がここで項羽本紀という物語全体を通じて初めて印象的に「笑ふ」のも意味のないことではない。残るのは騷だけである。「吾、公の長者なるを知る。吾、此の馬に騎ること五歳、當る所敵無し、嘗て一日に千里を行く。之れを殺すに忍びず。以て公に賜らん」。ここに言う馬が騷であることは、論を俟たない。こうして張られた伏線のすべてが収束するのであれば、物語として項羽はここで何の気がかりや気兼ねもなく死に赴くことができるのである。

項羽の主観的想いは以上のように結末をみるが、物語にはいま一つ別なレヴェルの枠組みが存在する。司馬遷は論贊において次のように項羽を批判する。「五年にして卒に其の國を亡ぼし、身は東城に死して、尚ほ覚寤せずして、自ら責め過めず、乃ち天の我を亡ぼし、兵を用ふるの罪に非ざるを引く。豈に謬らずや」。つまり司馬遷は物語を描きながら、その物語の枠組みを否定するのである。であれば、この司馬遷の批判は、物語の構造の上ではどのように保証されるのか。

明の凌稚隆は「史記評林」に載せる按語において次のように述べる。

「按ずるに太史公、漢を叙して曰く、取敖倉粟、曰く、就敖倉食、曰く、兵盛食多、と。楚を叙して曰く、燒楚積聚、曰く、絶楚糧食、曰く、兵罷食絶、曰く、兵罷食盡、曰く、兵少食盡、と。皆な紀中の關鍵にして當に玩すべし」。

凌稚隆の指摘は、楚漢の均衡が漢に傾いてから以降にのみに限られていたが、兵と食との記述は、実は既に楚漢の戦いのかかなり初めから丹念になされている。そこでは兵食において逆に漢が危機に陥った記述も当然なされているのである。つまり司馬遷は、項羽の主観的想いによる物語の枠組みと同時に、兵と食とによる客観的な枠組みをも布置しているのであり、それによって物語内部の項羽の主観的想いを充分に描きながら、しかもその上で自らがそれを批判することを可能ならしめているのである。

五

残された断片は、項羽が文字を習い、剣を学び、また兵法を学んだけれど、いずれも最後まで学びおえることがなかった、というエピソードである。

項羽が文字を学んだ、という記事は、先ず「高祖、盧縮壯なるに及び、俱に書を學ぶ」（韓信盧縮列傳卷九十三）が思い起こされる。

しかし、このエピソードに表された項羽像をどう評価したものと

捉えるかは、意見が分かれるかも知れない。「史記評林」の引く明の何孟春は、「項籍、兵法を喜び、略ぼ其の意を知りて、學ぶを竟ふるを肯せず。是れ眞に能く兵法を知る者なり」と、陶淵明と対照させつつ高く評価する。清の姚苜田が「史記菁華録」巻一に、「特に兩つの成らず、一つの學ぶを竟ふるを肯せずを寫すは、羽の結局、已に大概見るべし」と注記するのは、英雄とは認めながらも、むしろその中途で投げ出すあり方に、項羽自身の運命を重ねて見ようとするものであるように感じられる。

ところで、項羽は項羽本紀の中で、二人の人物からほぼ同じように非難されている。その一人は宋義であり、彼は「夫れ堅を破り鋭を執れば、義は公に如かざるも、坐して策を運らせば、公は義に如かず」と言いのけて、その後「猛きこと虎の如く、狠ること羊の如く、貪ること狼の如く、強くして使ふべからざる者」と項羽を評している。いま一人は高祖であり、彼は「吾は寧ろ智を闘はずとも、力を闘はず能わず」と、項羽の挑戦を斥けてる。いずれも項羽の「力」、勇さらには獯猛なまでの軍事力を認めつつも、それが「智」に支えられてはいないことを指摘することが共通する。前述したように、項羽は自らの実力を過信して天命と対峙させるほどなのであり、このエピソードが示すものも項羽の自恃の強さであると読むなら、それは項羽本紀全体の構造と密接に関わったものとして理解されうるであろう。司馬遷は、論贊において「自ら功伐を矜り、其の私智を奮ひて古へを師と」しなかつたと、項羽を批判している。

「自ら功伐を矜り」を項羽の自らへの過信と置き換え、「私智」とは真なる智に支えられることない「智」の謂いである、とするなら、

この構造は項羽本紀全体を通じて貫かれていて、と云ってよい。項羽が、その後半において「怒り」と優柔不断な「許諾」のあいだで、最期の悲劇へと突き進んでいくのも、またその変奏とみることができ。 「智」に支えられない「力」を過信するが故に一方では突発的な「怒り」に身を委かすことになり、他方充分に考え抜かれることのない決断は、信頼すべき范増のような人物の進言を受け入れることなく、孤立を深めながら、自らを悲劇に追いやる提案を項羽に「許諾」させるのである。

こうして読み進めるなら、この冒頭のエピソードも、項羽の自恃の強烈さと、それが途中で放擲されてしまうように、充分に突き詰められた「智」によって支えられたものではなかったことを示すものとして、布置されているように思われる。

本稿では、項羽本紀の冒頭に置かれた八つの断片が、どのような機能を持つかに論点をあわせ、項羽本紀の構造を論じた。このことは、他の本紀、世家、列伝などの冒頭に置かれた断片の意味と機能との理解にも関係するものと考えられる。

注

本稿は、別の角度から論じたとはいえ、その対象から拙稿「項羽本紀

「力能扛鼎、才氣過人」(杉山)

を読む」(名古屋大学文学部論集124・文学42 1996)と重なる部分を持つ。